

(株) ゴーイン



mikatuki98

電話が鳴ると、誰だろう？といつも警戒しながら目に見えない耳型のバリアを張って受話器に耳を当てる。すると今回は突然、キーの高い如何にも若くて可愛らしい風貌が目に見えかんで来そうな声が鼓膜に響いて来た。しかし話を聞いているうちに、可愛らしい風貌が徐々にお頭の弱そうな新米の女子社員に変わり、スローテンポの口調が受け応えをしているこちらに『時間の無駄使いだわ！』と思わせる程にイライラしてくる。何かしらのサービスの提供らしいが、面倒な手続きに付き合う暇は無いし、口頭での説明は正直内容の理解に苦しむ。

「今はその気はありませんので、失礼します！」

実はココからの電話はこれで3回目だが、いくら大手企業だからと言ってサービスを受けるのが当然のような口調に、回数を増す毎に不快感も比例して増してくる。

ところが後日、いつものように誰だろう？嫌な予感がするな……と思いながら電話を取ると、受話器の向こうで低音の、丁寧だが畳みかけるような強い口調の女性が突然、名乗ってきた。

「(株) ゴーインの強木(つよき)です！」

「?つよき?(って誰?)

瞬時に想像したところによると、その女性は(株) ゴーインの重要なポストにある、少なくとも今までコールして来た女子社員よりは格上の、恐らく上司という立場に違いない。きっとその会社では彼女の名前を聞けば有無も言わず相手をイエス言わせてしまう手腕の人間なのだろう。

しかしだ！たとえその会社でお偉い立場だろうが何だろうが、そもそも私はその女性のことを知らない。名前だって今初めて聞いたくらいだから、はじめましてと言われてもいい存在なのだ。なのにいきなり(株) ゴーインの強木だと言われても何とも答えようがない。

そして彼女は、3度同じことを電話して来た女子社員と同じような内容のことを言い始めた。要するに、あんたもいい加減にサービスを受けることに承知しないさいよ！と言うことらしい。

「……あの、ですからうちはその気はありませんので」

私はあくまでも沈着冷静な口調で対応した。しかし相手は(株) ゴーインの強木なんだぞ！私の言うことが聞けないのか！？と心の内でヒステリックに叫んでいる様子が目に見えるような口調。それでも私は言った。

「ではすみませんが、口頭ではよく理解出来ませんので、詳しい説明が書かれたパンフレットを送って下さい。それから検討させていただきますから」

実際、口頭ではハッキリ言って何が何だかよく分からなかった。ところが流石に(株) ゴーインの強木だ！と啖呵を切るだけある。遂に彼女は言い放った。

「名前を書いて印鑑を押しさえすればいいのよ！」

「……」

こんな言い方をされて誰がハイわかりました、と言って印鑑を押すだろうか？それは彼女が所属する会社の部下だけではないだろうか？ましてや私はこれでもお客様なのである。それに印鑑を押すって何処に？だからパンフレットを送って下さいと言っているのに……。

「すみせんがお断りします（ガチャ）」

対応をするのがバカバカしくなった私は、強引に電話を切るしかなかった。 了